

## 中村惕齋『論語集註鈔說』小考

はじめに

江戸期における朱子学の定着と伝播とを考えた場合、大きな足跡を残した人物として、京都の朱子学者・中村（仲村）惕齋（一六二九～一七〇二）の名を挙げることに異論は少ないだろう。惕齋は経解に限定しても『論語示蒙句解』を始めとする多くの仮名交じりの著作を作成した。それらは江戸期だけではなく、明治期以後も『漢籍國字解全書』（早稲田大学出版部）に収録され、読者を獲得している。これまでの研究において『論語示蒙句解』は主として漢籍啓蒙への影響から言及されている<sup>①</sup>。一方で惕齋は漢文体の経解も多く作成している。『筆記詩集傳』『筆記書集傳』を含む「五経筆記」や「四書」の解釈を示す『四書章句集註鈔說』である<sup>②</sup>。

『論語示蒙句解』に比して『四書章句集註鈔說』への言及は少ない。そのなかで、石田和夫氏は「朱子の『四書集注』を解説するための益のある説を集めて成った書。……『朱子文集』や『朱子語類』、さらには諸家の書から参考になるもの、あるいは助辞・閑字を解説

して役立つものなど、『集注』の解説に益ありと思われる説がひろく集められる」とする<sup>③</sup>。概ね惕齋の「四書章句集註鈔說序」に従い、『集注』との関係を簡潔に示している。しかし、『論語示蒙句解』との関係や解釈の特徴は明確ではなく、検討の余地がある。

そこで本稿では、中村惕齋の『論語集註鈔說』を検討し、彼の『論語』解釈の一端を明らかにしたい。なお、底本は家蔵の『四書章句集註鈔說』（宝永五年「二七〇八」本）とした。

### 一、中村惕齋の『論語』関係の著作

惕齋の『論語』に関する著作としては、漢文体の『四書章句集註鈔說』（元禄三年「一六九〇」の惕齋序、宝永五年「二七〇八」刊）中の『論語集註鈔說』と、仮名交じりの『四書示蒙句解』（元禄十四年「一七〇二」序刊）中の『論語示蒙句解』とがある。序文に従えば、『論語集註鈔說』は惕齋六二歳、『論語示蒙句解』は七三歳の成立である。

両書は体裁、時期ともに異なるものの全く別の注釈書ではなく、

青木 洋 司

関係する箇所も多い。ここでは両書の関係を『論語集注』学而篇「夫子至於是邦也」章の解釈の一部から確認したい。なお、『論語集注鈔説』（以下、『論語鈔説』と略す）の書き下しは省略した。

皇氏曰、夫子即孔子也。禮身經為大夫者、則得稱為夫子。孔子為魯大夫。故弟子呼之為夫子也。

夫子トハ、孔子ヲサス、古ハ大夫タル人ヲ夫子ト稱ス。孔子モ魯ノ大夫タリシ故ナリ。

〔論語示蒙句解〕学而)

『論語鈔説』では、皇侃の説を引用し、經文にいう「夫子」とは孔子であり、大夫となったものは夫子と稱す。孔子は魯の大夫となつたので、弟子たちは孔子を夫子と呼んだのである、とする。

『論語示蒙句解』では、「夫子とは孔子をさす」云々とし、經文の意味するところを理解が容易にできるように説いているかに見える。しかし、『論語示蒙句解』と先行する『論語鈔説』とを比べると、冒頭の「皇氏曰」を削除した上で節略し、仮名交じりにて示していることが看取できる。

このような記述は郷党篇「廢焚」章への解釈にも見える。先ほどと同様に両書を引用する。

蒙引云、……○一説、家語云、孔子為大司寇。國廐焚、子退朝、而之火所。與論語及雜記、所載本一事。而論語・雜記、去國字、非脱也。周禮六繫為廐、諸侯也。六廐、為校、天子也。大夫止稱阜、稱繫排閑、不得稱廐。故特言廐、可不煩言國廐。唐宋注疏、皆失攷。以為家廐非是。

〔論語鈔説〕郷党)

此廐ヲ、舊說ニミナ孔子ノ家ノ廐ナリトス、一説ニ、此事論語雜記家語ノ記ス所、モトミナ一事ナリ、家語ニハ國廐焚トアリ、夫子大司寇トナリ玉フ時、魯君ノ廐ヤケタルナリ、論語雜記ニハ、只廐トバカリアレドモ、凡ソ馬ヲツナグ所ヲ廐ト云ハ、天子諸侯ノコトニテ、大夫ハ阜ト云、又閑トモ繫トモ云、ヨリテ廐トバカリト云モ、即國廐ノコトナリト。

〔論語示蒙句解〕郷党)

『論語鈔説』では、冒頭に明代の朱子学者・蔡清『論語蒙引』の説を引用し、『論語示蒙句解』では、「舊説」とする説を引くことが異なる。また『論語鈔説』の末尾「唐宋の注疏、皆な攷を失す。家の廐と為すは是に非ず」も『論語示蒙句解』では省略されている。しかし、両書ともに「一説」とし、『孔子家語』の説などを示す点は共通する。両書を並べると、『論語蒙引』の説や唐宋の注疏への言及を適宜省略していることが確認できる。つまり、『論語鈔説』の説のうち、初学者には無用な箇所を節略し、『論語示蒙句解』に用いたと考えられるのではないか。

学而篇「夫子至於是邦也」章や郷党篇「廢焚」章の解釈に見えるように『論語鈔説』と『論語示蒙句解』には共通する点が多い。初学者などに向け、訓蒙を目的とする『論語示蒙句解』と、後述するように想定する読者が初学者には限定されない『論語鈔説』との作成目的は異なるため、当然ながら解釈上の異同も散見される。しかし、右に示した両書の解釈の共通する点に見えるように、従来の研究において『論語示蒙句解』の特徴とされる点も先行する『論語鈔説』の特徴の一部と見なすことができる。如上の両書の関係は注意

すべきである。

辻本雅史氏は、両書の関係について『四書示蒙句解』は、明代四書学の典拠と和訳もついた初学者向けテキストである。さらにその簡略版の『四書章句集註鈔説』も版を重ねた<sup>5)</sup>とする。これまでに確認したように、両書の作成された時期も含めて考えると、『論語示蒙句解』の特徴的な箇所多くは、先行する『論語鈔説』に基づいて作成されている。従って、惕齋は先に作成した『論語鈔説』の内容を節略し、『論語示蒙句解』に用い、仮名交じりにしていると考えられる。つまり、『論語』の場合は明代四書学も踏まえた『論語鈔説』を先に作成し、そのなかから初学者に無用な箇所を節略し、簡略版の『論語示蒙句解』を作成した、と改めるべきである。

さて、惕齋は多くの著作を上梓したことでも著名である。原念齋の『先哲叢談』正編、巻四では、惕齋の著作について、

其筆記詩集傳の後の記す所四十五部、凡そ三百十八卷、其鈔梓の者十六部、凡百七十四卷、而歿後刊する所の者甚だ多し。

とする。これら多数の著作のなかで惕齋の弟子の河村誠之は次のように記している。

先生以傑出之資、能自得乎此、而有以續此道之傳。遂著四子鈔説、以為朱傳之階梯。學者由乎此、則可以不失紫陽。不失紫陽、則孔孟之道、可以明于當世。仲子之功、可謂大矣。……

(『書于惕齋先生行狀後』)

先生 傑出の資を以て、能く自ら此れを得て、以て此の道の傳

に續くこと有り。遂に四子鈔説を著して、以て朱傳の階梯と為る。學者、此れに由れば、則ち以て紫陽を失はざるべし。紫陽を失はざれば、則ち孔孟の道、以て當世に明らかなるべし。仲子の功、大なりと謂ふべし。……

先生は「四子鈔説」(『四書章句集註鈔説』)を著した。同書は朱子の学術への入り口である。学者は「四子鈔説」を学べば、朱子の意図に違ふことはない。朱子の意図に違わなければ、孔孟の道も当世に明らかとなる。先生の功績は偉大なものといえよう。

河村誠之は惕齋の著作のうち、特に『四書章句集註鈔説』を取り上げ、賞賛している。同書を惕齋の名著とみなしていたのであろう。先に示したように、現在では『四書章句集註鈔説』への言及は少ない。しかし、江戸期では、正徳三年本、文政五年本、天保七年本、嘉永四年と版を重ね、読者を獲得している。この他にも、南山道人『諸家人物志』上、儒家部の惕齋の項では、「姓ハ中村、名ハ欽、字ハ敬甫、稱七右衛門。洛下ニ講學ス。阿州疾ノ儒臣ナリ」(句読点は筆者が補った。)とし、続けて、惕齋の著作を挙げる。その冒頭は「四書鈔説」である。当時において惕齋の代表的な著作を『四書章句集註鈔説』とする評価があったことが看取できる。『論語示蒙句解』との関係や河村誠之の発言なども踏まえると、『論語集註鈔説』は等閑視すべき著作ではなく、重要な著作である。

## 二、『四書章句集註鈔説』述作の意図

ここでは『四書章句集註鈔説』(以下、『四書鈔説』)の述作の意

図を確認したい。『四書鈔説』の冒頭には楊齋による序文「四書章句集註鈔説序」がある。また、末尾には楊齋の有力な弟子で著作の刊行に大きな役割を果たした増田立軒（一六七三—一七四三）による跋文「跋四書鈔説」があり、それぞれに述作の意図などが示される。まずは、楊齋の「四書章句集註鈔説序」を取り上げたい。

……。朱子竭一生之心力、以極乎精確、不俟添隻字、而其義自足矣。解法平易近實、而理味深遠無窮。故至其微旨奧義、則非有朱子之襟懷、不能究盡。其及門承流之士、下逮元明諸儒為之說者、不知其幾百家。而無一足全取者。況多妨本旨者乎。

……。朱子文集・語類之說、多及此者。固足以審本註之餘緒矣。諸家之說叢、措辭簡潔、裁義穩當者、亦頗有所啓發。且於通章之大旨、及科段・脉絡之弁、起應開結之限、與夫助辭・閑字之解、亦不為無少補。……。於是正文及註脚、有所須論辨者、鈔出其題頭、而乃混融諸說、以闡明其義、間亦竊據愚臆、以填塞其闕。雖諸家異本註之說、然其有所不可舍者、亦標一說、存之。

（「四書章句集註鈔説序」）

……。朱子、一生の心力を竭くし、以て精確を極め、隻字を添へることを俟たずして、其の義自ら足れり。解法は平易・近實にして、理味は深遠・無窮なり。故に其の微旨・奧義に至りては、則ち朱子の襟懷に非ざれば、究め盡くす能はず。其の門に及び流を承るの士、下は元明の諸儒に逮るまで之が説を為す者は、其の幾ど百家といふことを知らず。而れども一も全く取るに足る者無し。況んや多く本旨を妨げる者をや。……。朱子文集・語類の說、此れに及ぶ者多し。固に以て本註の餘緒を審に

するに足れり。諸家の說叢、辭を措くこと簡潔にして、義を裁すること穩當なる者、亦た頗る啓發する所有り。且つ通章の大旨、及び科段・脉絡の弁、起應・開結の限と、夫の助辭、閑字の解とに於いて、亦た少補を無しと為さず。……。是に於いて正文及び註脚、須に論辨すべき所の者有れば、其の題頭を鈔出して、乃ち諸説を混融して、以て其の義を闡明して、間亦た竊かに愚臆を據て、以て其の闕を填塞す。諸家の本註に異なるの說と雖も、然れども其の舍つべからざる所の者有れば、亦た一説を標し、之を存す。……。

『四書章句集註』は朱子が一生の心力を尽くし、精確を極めた著作であり、僅かな言葉でさえも足すことはできない。『集注』の解は平易で近実なものであるが、理味は深遠で窮まりない。そのため、微旨や奧義までを究め尽くすことは難しい。朱子の弟子や元明の諸儒たちは『集注』に注釈を行ったが、それらは朱子の意を十全に読み取ったものはない。そこで私は『朱子文集』『朱子語類』や諸家の説を参考にして、議論すべき箇所を抄出し、諸説を用いて、朱子の意を究明し、時には自己の解釈を付け加えた。

右では『集注』を賞賛し、その上で異なる説でも見るべきものあれば、一説として『四書鈔説』に収録するという方針を示す。楊齋のいう「諸家」の説は増田立軒「跋四書鈔説」に次の言及が見える。

……。朱子既没、宋元明清諸儒競起、建說著書、曷啻數十家乎。……。但有時或挾私見、或失正意、或煩舌相做、而屋下架屋。……。吾先師楊齋先生有憂于此。上自漢唐註疏、下至明清經解、

蒐輯貫綜、以撰四書鈔說十二冊。……。(跋四書鈔說)  
 ……。朱子既に没し、宋元明清の諸儒競ひ起り、説を建て書を著はすこと、曷ぞ啻だに數十家のみならんや。……。但だ時として或いは私見を挟み、或いは正意を失ひ、或いは煩舌相ひ倣し、而も屋下に屋を架すこと有り。……。吾が先師楊齋先生は此れを憂ふこと有り。上は漢唐の註疏より、下は明清の經解に至るまで、蒐輯・貫綜して、以て四書鈔說十二冊を撰す。……。

朱子の没後、種々の学説が起り、私見を挟むものも出現し、屋下に屋を架す状況となった。師の楊齋は、この状況を憂い、上は漢唐の註疏から下は明清の經解に至るまでを取捨選択し、『四書鈔說』を作成した。

楊齋の序文や立軒の跋文の記述に見えるように、『四書鈔說』は『朱子文集』『朱子語類』、さらには古註疏から明清の經解までを取捨選択し、引用している。前掲の石田氏は、その基準を『集注』の解説に益ありと思われる説」としていた。ただし、楊齋は序文において「本註に異なるの説と雖も、然れども其の舍つべからざる所の者」としている。『集注』の理解に有益であれば、朱子と異なる説の引用も厭わないことは補うべきである。

ところで、『論語鈔說』には「四書章句集註鈔說序」にいう『朱子文集』や『朱子語類』が多く引用されている。これは胡広等『論語大全』からの孫引きではない。『論語大全』に見えない説の引用、具体的には『論語蒙引』や陸南陽・姚舜牧など明代の諸説、何晏等の『論語集解』などが広く確認できる。従って、『論語鈔說』は『論

語大全』所引の所説を切り貼り、あるいは、抄出した類いの解釈書ではない。元祿期の毛利貞齋の『重改論語集註俚諺鈔』における引用諸注が熊谷立閑『鼈頭新增四書大全』に多く拠っているのは異なるものである。江戸期における明代四書学の受容の面からは注意する必要がある。

なお、『論語鈔說』は邦儒の解釈の引用に消極的であり、僅かに郷党篇において「江州中江氏」「中江氏」として、中江藤樹の解釈を引用する程度である。明代四書学や邦儒との関係は楊齋の学的立ち位置を考える上でも別途取り上げる必要がある。以下、『論語鈔說』における『論語』解釈の注釈態度を検討したい。

### 三、『論語集註鈔說』における注釈態度

#### (一)『集注』尊重

「四書章句集註鈔說序」に見える『集注』尊重の態度は当然ながら『論語鈔說』でも同様である。例えば、『論語』末尾の堯曰篇「不知命、無以爲君子也」章には次のようにいう。

欽按、……。子朱子於篇端序説、既載程子便是不會讀之言、而篇末總註、又取尹氏幾於侮聖言之説。其丁寧・諄懇、警學者之意、亦可謂至矣。讀之而猛省奮進者、雖日日講論此書、而字磨句礪、然無益於己必矣。豈非可恥之甚、而可畏之嚴者哉。

〔論語鈔說〕堯曰

欽按ずるに、……。子朱子、篇端の序説に於いて、既に程子の便ち是れ曾て之を讀まざるの言を載せて、而も篇末の總註に、

又た尹氏の聖言を侮るに幾きの説を取る。其の丁寧・諄懇にして、學者を警すの意、亦た至れりと謂ふべし。之を讀み猛省・奮進せざる者は、日に此の書を講論し、字ごとに磨き、句ごとに礪くと雖も、然れども己に益無きは必せり。豈に恥づべきの甚しく、畏るべきの嚴なる者に非ざらんや。

朱子は『集注』冒頭の「論語序説」に程子のいう「読み終わっても同じ程度なのは全く読んでいないのと同じだ」との説を引用し、末尾には尹氏のいう「学ぶものが若い時に読み、老いた時に実行できなければ、それは聖人の言葉を侮るものである」との説を引用した。これは懇切丁寧な態度であり、學者への注意として、この上ないものである。『集注』を読み、懸命に努力をしない者は日々研究しても何の役にも立たない。これは恥ずべきことであり、恐れるべきことである。

右では『集注』冒頭と末尾とに『論語』を読むことに関する言説を引用したことを賞賛する。そして、『集注』を読む者に「猛省奮進」することを求めている。このためであろうか、『論語鈔説』では『集注』のより深い理解を目的とする注釈を行うこともある。

例えば、公治長篇篇「子謂子賤」章では経文に孔子の弟子である「子賤」が登場する。当該箇所『集注』は「子賤、孔子弟子、姓名、名不齊」とあり、「子賤」が孔子の弟子であることと姓名とを示すのみである。これに対して、『論語鈔説』には次のようにいう。

按家語子賤少孔子四十九歳。則孔子卒時、子賤纔二十四歳。蓋以其年甚少。故孔子本其德之所由成以稱之。

〔論語鈔説〕公治長

按ずるに、家語に子賤、孔子より少きこと四十九歳、と。則ち孔子の卒する時、子賤、纔かに二十四歳ならん。蓋し其の年の甚だ少きを以てす。故に孔子、其の徳の由りて成る所に本づきて以て之を稱す。

『孔子家語』には、子賤は孔子よりも四十九歳ほど若い、とある。従って、孔子が亡くなった時、子賤は僅かに二十四歳である。思うに、この時、子賤は非常に若かったため、孔子は本章の発言をし、子賤を褒め称えたのである。

「子謂子賤」章への注釈では『論語集注』には用いられていない『孔子家語』を引用している。これは『集注』を通しての経文の理解をより深めることを目的とするためであろう。ただし、『集注』に見えない文献を引用し、理解を深めることを目指す手法は『論語鈔説』の全篇に用いられるのではない。

具体的にいえば、孔子の有力な弟子としては、学而篇「其爲人也孝弟」章では有子（有若）が、同じく学而篇「吾日三省吾身」章では曾子（曾參）がそれぞれ初出である。しかし、子賤の場合とは異なり、『孔子家語』などの文献を用いた注釈を行うことはしない。子賤の場合は『論語』において公治長篇の一章のみ登場するため、補ったのではないか。その証左として、『論語鈔説』では「跋四書鈔説」に言及があったように「古註疏」も引用する。しかし、学而篇「吾日三省吾身」章の「傳不習乎」など新注・古注で解釈が分かる経文において『集注』と異なる別解は引用しない。これは別解を引用することで読者を惑わすことを避けたのだろう。背景にある

のは、もちろん、『集注』の尊重である。

ただし、これらは『集注』への護教的な態度を意味しない。ここでは学而篇「父在觀其志」章を取り上げ、『集注』への態度を考えたい。まずは朱注である。

○父在、子不得自專。而志則可知。父没、然後其行可見。故觀此足以知其人善惡。然又必能三年無改於父之道、乃見其孝。……

○父在せば、子自ら専らにするを得ず。而れども志は則ち知るべし。父没して、然る後其の行を見るべし。故に此れを觀れば以て其の人の善惡を知るに足る。然れども又た必ず能く三年父の道を改むること無くして、乃ち其の孝を見る。……

『集注』では、父の没後、子の行動を觀察すれば、その人が善か悪かを理解できるとする。そのため、本章は人物を鑑定する方法となり得ることをいう。これに対して、『論語鈔説』は次のようにいう。

欽按、此章是聖人觀人子志行、而斷之以孝也。末句總承、恐非泛觀人之法。敢存疑。〔論語鈔説〕学而

欽按ずるに、此の章は是れ聖人、人子の志行を觀て、而して之を斷ずるに孝を以てするなり。末句總承、恐らくは泛く人を觀るの法に非ず。敢へて疑を存す。

私が考えるに、「父在觀其志」章は、孔子が子の志と行動とを觀察して、孝か否かを判断すべきとしたのである。おそらくは、あまねく人を鑑別する方法ではない。思い切つて疑問を呈する。

「父在觀其志」章については解釈を修正する必要性を唱えるので

はなく、「敢へて疑を存す」と一定の尊重を示した上で疑問の提示している。本章以外にも『論語鈔説』では『集注』に疑問を呈することがある<sup>10)</sup>。しかし、それらは『集注』への積極的な批判ではない。以上をまとめると、『論語鈔説』では『集注』尊重の態度のため、異説や別解を掲示するのに抑制的である。

## (二) 圏外の説への態度

『論語集注』では本注の後には圏点があり、それ以後に「圏外の説」が配置されることがある。圏外の説には主として經文を理解するための補説などが引用される。

『論語鈔説』では圏外の説も議論の対象となることが多い。ここでは『論語集注』泰伯篇「啓予足、啓予手」章を取り上げたい。『集注』では圏外に以下の三説を引用している。

……○程子曰、君子曰終、小人曰死。君子保其身以没。為終其事也。故曾子以全歸為免矣。尹氏曰、父母全而生之、子全而歸之。曾子臨終而啓手足、為是故也。非有得於道、能如是乎。范氏曰、身體猶不可虧也。況虧其行以辱其親乎。

〔論語集注〕泰伯

……○程子曰はく、君子は終と曰ひ、小人は死と曰ふ。君子は其の身を保ちて以て没す。其の事を終ふるが爲なり。故に曾子全くして歸すを以て免がると爲す、と。尹氏曰はく、父母は全くして之を生み、子全くして之を歸す。曾子終に臨みて手足を啓かしむるは、是が爲の故なり。道に得ること有るに非ざれば、能く是の如からんや、と。范氏曰はく、身體すら猶ほ虧

くべからず。況や其の行を虧き、以て其の親を辱むるをや、と。

各説の詳細は省略するが、『集注』では、本注だけではなく、経文の解釈に関連する程子、尹氏、范氏の三説が補説として引用されている。これに対して、『論語鈔説』では以下のようにいう。

欽按、父母全而生之、子全而歸之、可謂孝矣。……故朱子恐讀者或不曉之。故圈外取程尹兩説、以表其意。又繫范氏之言於後、示保徳護身之輕重。但范説非正解。〔論語鈔説〕泰伯）  
欽按ずるに、父母は全くして之を生み、子全くして之を歸すは、孝と謂ふべし。……故に朱子、讀者の或いは之を曉らざるを恐る。故に圈外に程・尹の兩説を取り、以て其の意を表す。又た范氏の言を後に繋げ、保徳・護身の輕重を示す。但だ范説は正解に非ず。

父母は五体完全の子を産む、子が五体完全のまま父母にお返しすることが孝である。朱子は読者が孝を理解しないことを恐れた。そのため、圈外に、程子・尹氏の兩説を置き、それを明らかにし、その後に范氏の説を置き、保徳や護身の輕重をも示した。しかし、范氏の説は当該章への正しい解釈などではない。

泰伯篇「啓予足、啓予手」章では、「欽按」とし、自説であることを明確にしている。ここでは朱子が圈外に程子、尹氏の説を配置した意図を説明し、同じく圈外に引用される范氏の説を正しい解釈ではないと批判する。范氏は経文に見える兩親から頂戴した体を守る「護身」に加えて、経文には見えない「保徳」の重要性を論じて

いるため、このような批判に至ったのだろう。

『論語鈔説』における圈外の説への疑義や批判は「啓予足、啓予手」章だけではなく、子罕篇「達巷黨人」章など多くの例を見出すことができる。次に、その理由を子罕篇「鳳鳥不至、河不出圖」章への注釈から検討したい。まずは『集注』の圈外の説である。

○張子曰、鳳至圖出、文明之祥。伏羲・舜・文之瑞不至、則夫子之文章、知其已矣。〔論語集注〕子罕）  
○張子曰はく、鳳至り圖出づるは、文明の祥なり。伏羲・舜・文の瑞至らざれば、則ち夫子の文章其れ已むことを知る、と。

『集注』では、張子の「鳳が飛来し、図が出現するのは瑞祥である。伏羲・舜・文王のような瑞祥が見られないのは、孔子の伝えようとした威儀や文辞が行われなくなってしまうことが分かる」との説を引用する。これに対して、『論語鈔説』では以下のようにいう。

張説、欽按、鳳文・圖畫、於文章為切。然本文泛説。疑不止言文章。且二者之瑞、非夫子自當之。故此説写圈外歟。〔論語鈔説〕子罕）

張説、欽按ずるに、鳳文・圖畫、文章に於いて切なりと為す。然れども本文は泛く説く。疑ふらくは止だ文章を言ふのみならず。且つ二者の瑞、夫子の自ら之に當たるに非ず。故に此の説、之を圈外に写すか。

張子の説は鳳が飛来し、図が出現することを威儀や文辞と結びつ



けている。しかし、経文は広く述べているのであり、威儀や文辞の  
みを対象とはしていない。加えて、鳳や図といった瑞祥は孔子と直  
接関わるのではない。従って、朱子は張子の説を圏外に配置したの  
であろう。

張子の説は経文の意と合致しないと、そのため、圏外に配置さ  
れていると説く。朱子が圏外に当該の説を配置した意図までを説明  
する解釈である。先ほど取り上げた泰伯篇「啓予足、啓予手」章や、  
ここに取り上げた子罕篇「鳳鳥不至、河不出圖」章においても経文  
の解釈と合致しないことを指摘している。

以上をまとめると、楊齋は『論語鈔説』において、『集注』を尊  
重しつつも、圏外の説のなかには経文の意と合致しないものが含ま  
れているとし、疑問を呈する。ただし、『論語鈔説』の議論の対象  
は『集注』や圏外の説だけではない。楊齋の自説も存在する。以下、  
楊齋の自説のなから、特に「學」の解釈を取り上げ、検討したい。

#### 四、『論語集註鈔説』における「學」の解釈

『論語』注釈書の多くは字而篇「學而時習之」章の注釈に重点を  
置く。これは『論語鈔説』でも同様である。ここでは「學而時習之」  
章の経文「子曰、學而時習之、不亦説乎」への注釈から主として、  
その冒頭や「學」に関連する注釈を取り上げ、検討する。まずは『集  
注』である。

…… ○學之為言效也。人性皆善。而覺有先後。後覺者必效先  
覺之所為、乃可以明善而復其初也。…… 程子曰、…… 又曰、

學者、將以行之也、時習之、則所學者在我、故説。……。

（『論語集注』学而）

…… ○學の言爲るは效なり。人の性は皆な善なり。而して  
覺るに先後有り。後覺者は必ず先覺の爲す所に效へば、乃ち  
以て善を明らかにして其の初めに復るべきなり。程子曰はく、  
…… 又た曰はく、學者、將に以て之を行はんとするや、時に  
之を習へば、則ち學ぶ所の者我に在り、故に説ぶ、と。……。

『集注』では、「學」の字が「效う」の意であること、人の本性は  
みな善であるが、それを理解するには先と後とがあり、後に理解す  
る者は先に理解した者の行いに效い、本来の善なる状態に復帰する  
こと、及び、程子のいう、学問をしようとする者は何度も復習すれ  
ば、学んだ内容が自分のものとなる。従って、「説」となる、という。  
著名な注釈であるが、「學」と性善とを関連させていることが看取  
できる。これに対して、『論語鈔説』では以下のようにいう。

子者指孔子。子是有德之稱。古者稱師為子也。…… ○人性皆  
善至初也。首原當學之故、次示學之方、終要為學之功。覺字  
兼知行。為猶學也。指先覺致知・脩行之方。…… ○學者將以  
行之。此學字兼知行。所學者在我、謂其可以施乎行也。在我字、  
蓋淺言之、不必説盡得之。…… （『論語鈔説』学而）

子は孔子を指す。子は是れ有徳の稱。古へは師を稱して子と為  
すなり。…… ○人の性は皆な善より初めなりに至るまで。首  
めに當に學ぶべきの故を原ね、次に之を學ぶの方を示し、終に  
學を為すの功を要む。覺の字は知行を兼ね。為は猶ほ學のこと

きなり。先覺の致知・脩行の方を指す。……。○學は將に以て之を行はんとす、と。此の學の字は知行を兼ね。學ぶ所の者、我に在り、と。其の以て行に施すべきを謂へり。我に在りとは、字、蓋し浅く之を言ふ。必ずしも盡く之を得たりと説かず。……。

冒頭は、經文の「子曰」の「子」とは孔子を指すことから始まる。これは平易かつ丁寧な注釈に見える。しかし、『論語註疏』を取捨し、『集注』にない箇所を補ったものであり、創見ではなく、先行する注釈の利用である。『集注』を補う態度といえよう。続けて、『集注』では、初めに学ぶ理由、次に学ぶ方法、最後に学んだことによる成果を求めることをそれぞれ示した、とする。注目すべきは、『集注』「覺有先後」・「學者、將以行之也」の「覺」・「學」をともに「知行を兼ね」とすることである。これは先に引用した『集注』には全く見えない解釈である。

ここに見える「兼知行」の重視は楊斎のみではない。朱子も同様であり、その影響を受けたことは疑いないだろう。土田健次郎氏は、朱子の知と行の議論は二点にまとめることができるとし、「第一点は知が先で行が後であるのが基本であること、第二点はその知を深めるには知と行の相乗効果が重要なことである」とする<sup>13</sup>。楊斎は、このうち、第二点に影響を受け、「兼知行」を強調したとも考えられるが、それを『論語』の解釈上に示したところが特徴である。ただし、「學而時習之」章の「學」に限っては、熊谷立閑『鼈頭新增四書大全』所引の『四書存疑』などにも同様の説が見える<sup>14</sup>。従って、右の議論は明代四書学の受容の結果であることも否定できない。し

かし、以下に示すように『論語』の「學」の多くに示したことが楊斎の特徴である。

『論語鈔說』において「學」を「兼知行」と解釈することは学而篇「學而時習之」章だけではなく、広く確認できる。ここでは為政篇「學而不思則罔」章を取り上げたい。同章では、經文に「子曰、學而不思則罔、思而不學則殆」とあり、孔子が「思」と「學」との関係を述べている。まずは『論語集注』である。

……。不求諸心。故昏而無得。不習其事。故危而不安。○程子曰、博學・審問・慎思・明辨・篤行、五者、廢其一、非學也。

（『論語集注』為政）

……。諸を心に求めず。故に昏くして得ること無し。其の事を習はず。故に危くして安からず。○程子曰はく、博學・審問・慎思・明辨・篤行、五者、其の一を廢すれば、學に非ざるなり、と。

『集注』では、心で分かることを求めなければ、道理に暗く、得るものはない。学習しなければ、あやうく、落ち着くことはないとし、圏外に、程子のいう、博學・審問・慎思・明辨・篤行の五者のうち、その一つでも捨て去るのであれば、それは「學」ではないとする説を引用する。これに対して、『論語鈔說』では次のようにいう。

註一其字好看。思者求其理於心也。學者習其事身也。……。據註、則上學字兼知行、下學字專屬行。若下學字、以讀經考史、而證其所思者、置其内、則亦可以兼知行。 （『論語鈔說』為政）

註の一の其の字は看るに好し。思は其の理を心に求むるなり。

學は其の事を身に習はずなり。……註に據れば、則ち上の學の字は知行を兼ね、下の學の字は専ら行に属す。下の學の字の若きは、經を讀み史を考へ、而も其の思ふ所を證する者は、其の内に置けば、則ち亦た以て知行を兼ねべし。

程子のいう「其一」の「其」は重要である。經文の「思」とは、理を心に求めることであり、「學」とは、その事を自分の身に修得することである。『集注』に従うと、「學而不思則罔」の「學」は知行を兼ねるものであり、「思而不學則殆」の「學」は行に属すものである。ただし、經を讀み、史を考え、思うところを自身に確かめてみるならば、知だけではなく、知行を兼ねるものとなる。

右に見えるように『論語鈔説』では、「學而不思則罔」の「學」と「思而不學則殆」の「學」に異なる解釈をしている。つまり、前者の「學」を「兼知行」とし、後者の「學」を「行」のみとしている。さらに「行」から「兼知行」へと進む工夫も示している。「學而不思則罔」章のように、經文の内容を「知行」に分けて解釈することは他章にも見える。これらは全て『集注』には見えない解釈である。楊齋にとつての「兼知行」の重要性が看取できよう。

なお『論語鈔説』における「兼知行」は、為政篇「吾十有五而志于學」章のように、先後を示すこともある。同章の經文「吾十有五而志于學」に関しては、孔子の志した「學」とは何か、という大きな問題が存在する。『集注』では「學」を「此の所謂の學は、即ち大學の道なり（此所謂學、即大學之道也）」とし、志した学を「大學之道」、つまり、「大學で教える道」とする。『論語鈔説』では同章に次のようにいう。

此志字大有力。乃與下立不惑等一例看。……學兼知行。下五節、亦然但其立言、各有所主。要之畢竟知先而行後矣。

（『論語鈔説』為政）

此の志の字は大いに力有り。乃ち下の「立」「惑はざる」等と一例に看よ。……學は知行を兼ね。下の五節は、亦た然して但た其の言を立つること、各おの主とする所有り。之を要するに、畢竟、知は先にして行は後なり。

經文の「志」の字は重要であり、同じく經文の「三十而立」の「立」、「四十而不惑」の「不惑」と同様に考える必要がある。經文の「學」は知行を兼ねるものであり、「十有五而志于學」以下の「三十而立」「四十而不惑」「五十而知天命」「六十而耳順」「七十而從心所欲、不踰矩」の五節には、それぞれ要点がある。結局のところ、知が先行が後である。

右では、孔子の志した「學」を「知行を兼ねる」ものとしており、『集注』と異なる方向性の解釈である。また、知行の先後は、知が先であり、行が後にあると、結論づけている。この議論は先ほど引用した土田氏の「知行」に関する朱子の見解と同じである。繰り返しになるが、「兼知行」に関する発想の淵源は楊齋独自とは言い難い。しかし、それを『論語』中の「學」の解釈に用いたことが特徴である。楊齋のいう「兼知行」の重視は『論語』の解釈だけに見えるものではない。「四書」解釈に通底するものである。例えば、『孟子』告子下「羿之教人射」章への解釈において、楊齋は「學は是れ知行。堯舜の精一、孔顔の博約の如き、皆な法なり」とする。これも『集注』には見えない解釈であり、「知行」と朱子学における重要な工

夫である「精一」「博約」と並べていることは重要である。

楊斎の学術にとつて、このような「兼知行」の重視は、どのような意味を有していたのだろうか。前出の楊斎の弟子、増田立軒は「楊斎先生行状」において、楊斎の学術の要点として、「涵養・致知・力行」を挙げる。これを踏まえると、「兼知行」とは「致知」と「力行」とを兼ねるものであり、楊斎が学術の要諦としていたものに含まれる。そのため、『論語』解釈中に言及が多いのではないか。

なお、附言すると、楊斎の「兼知行」の重視は同時代の『論語』解釈に影響を与えた可能性が存在する。伊藤仁齋『語孟字義』には「先儒云ふ、學は知行を兼ねて言ふ、と。之を得たり」なる記述が見える<sup>(18)</sup>。土田健次郎氏によると、伊藤家では『四書章句集註鈔說』の所説が問答の対象となり、意識されていた。これに従うならば、仁齋が楊斎の言説を「先儒」として引用し、評価した可能性も存在する。楊斎学術の同時代やその後と与えた影響の有無も検討する必要がある。後考を期したい。

### おわりに

本稿は朱子学の定着と伝播に大きな足跡を残した中村楊斎の『論語集註鈔說』を検討した。以下、本稿において明らかとなった主たる三点を確認したい。

第一は『論語集註鈔說』と『論語示蒙句解』の関係である。楊斎の『論語』に関する著作としては『論語集註鈔說』と『論語示蒙句解』とが存在する。両書は体裁、作成時期ともに異なる。しかし、本稿に示したように『論語示蒙句解』の特徴とされる点も実際には

先行する『論語集註鈔說』の節略である。楊斎は先に『論語集註鈔說』を作成し、そのなから、初学者に無用な箇所を節略し、簡略版の『論語示蒙句解』を作成したのである。なお、『論語集註鈔說』では、『朱子文集』や『朱子語類』、漢唐や明清の諸注釈なども広く引用している。これは胡広等『論語大全』の抄出ではなく、楊斎が取捨選択した結果である。そのため、『論語集註鈔說』は江戸期における明代四書学の受容の面からも注意する必要がある。

第二は注釈態度である。楊斎は「四書章句集註鈔說序」や『論語集註鈔說』中に見えるように『集注』を尊重している。そのため、『論語』解釈では異説・別解の揭示に消極的である。しかし、それは『集注』への護教的な態度を意味しない。楊斎は修正が必要であると判断した箇所自説を示すことがある。特に『集注』の所説のうち、圏外の説は経文の意と合致しないものが含まれることがあるとし、疑問を呈することがある。

第三は「學」の解釈である。「學」に言及のある諸章において、楊斎は「兼知行」、あるいは「知」「行」に分けて解釈しており、「學」と「知行」とを関連付ける。このような「兼知行」を重視する発想の淵源は朱子に基づくと考えられる。しかし、それを『論語』中の「學」の解釈に用いたことが楊斎の特徴である。なお、「兼知行」の重視は『論語』や『孟子』の解釈に限定されない。

本稿は『論語集註鈔說』の特徴の一部分を指摘したにすぎない。明代四書学との関係、楊斎の朱子学理解の具体的な検討、邦儒の解釈の引用に消極的である理由、江戸期における『論語』解釈史上の『論語集註鈔說』の位置付けなど、課題が多く残った。今後は本稿で明らかになった点を踏まえて、これらの問題について、より深い分析

を行いたい。

注

- (1) 石本道明氏「中村楊齋『論語示蒙句解』小考」学問は人格の陶冶のために―『江戸期『論語』訓蒙書の基礎的研究』所収、明德出版社、二〇二二）参照。
- (2) 『筆記書集傳』については、拙稿「中村楊齋『筆記書集傳』管見」〔國學院中國學會報〕六十八輯、二〇二二）参照。
- (3) 『日本思想史辞典』二二八頁（河原かん社、二〇〇一）参照。『四書章句集註鈔說』について、大江文城氏は「我が国の『集注』の解説として、最も要領を得たもの」〔本邦四書訓點并に注解の史的研究』関書院、一九三五、二〇五頁）とする。また、柴田篤氏は『四書集註』に基づいてこれをさらに咀嚼解明したもの」（柴田篤氏『中村楊齋』〔叢書 日本の思想家「室鳩巢」と合冊）明德出版社、一九八三、七九頁）とする。この他にも、竹治貞夫氏『近世阿波漢学史の研究』（風間書房、一九八九）第二章 増田立軒 第三節 立軒の学問と著述（一）「四書鈔說」では、立軒と該書の関係に触れ、末尾に「楊齋の精到明晰なこの四書注解」は後世に広く行われている」とする。
- (4) 前掲石本氏論文に『論語示蒙句解』の作成目的などは詳しく論じられている。
- (5) 『江戸の学びと思想家たち』五八～五九頁（岩波書店、二〇二二）参照。なお、明代四書学の典拠は『四書章句集註鈔說』にはあ見える、『四書示蒙句解』に見えない。やや疑問のある記述である。
- (6) 楊齋の著作の刊行に努めた増田立軒の家系、事跡、学問、子孫などに関しては竹治氏前掲書参照。
- (7) 拙稿「毛利貞齋『重改論語集註俚諺鈔』について―引用諸注を中心として―」〔江戸期『論語』訓蒙書の基礎的研究』所収、明德出版社、二〇二二）参照。
- (8) 郷党「君子不以紺緌飾」条「江州中江氏謂、以下条推之、蓋亦内外相称也。……」、「食不厭精、膾不厭細」条「○不多食。中江氏曰、玩不厭、不徹之語、則不多食之意、躍如也。……」など。これらは『論語郷党啓蒙翼伝』からの引用であろう。
- (9) 「論語序説」「程子曰、今人不會讀書。如讀論語、未讀時是此等人、讀了後又只是此等人、便是不會讀」『論語集注』堯曰「尹氏曰、……。學者少而讀之、老而不知一言為可用、不幾於侮聖言者乎」以下、『論語集注』の解釈は、吹野安氏・石本道明氏『孔子全書』1～10（明德出版社、一九九九～二〇〇六）、及び、土田健次郎氏『論語集注』1～4（平凡社東洋文庫、二〇一三～二〇一五）を参考にした。
- (10) 例えば、公冶長「寧武子、邦有道則知」章では「……。○欽按據此說、則程子所謂免患者、亦兼說保身濟君而成其功。竊謂武子之愚、不可及處、蓋在之士所不為而不避之、凡所以保身濟君者、無有遺策。若夫功之成否、則不可必論也。集註只以其能成功為不可及、可疑矣」とする。
- (11) 『論語鈔說』子罕に「尹説、欽按尹氏博學及名字。説得差大。非正旨也」とある。この他にも、雍也「誰能出不由戸」章に「洪説戸與道對説。蓋非本旨」とするなど、圈外の説を「正旨」「本旨」ではないとする例は多い。
- (12) 『論語註疏』学而に「○正義曰、……。子者、古人稱師曰子。子、男子之通稱。此言子者、謂孔子也。……。」とある。
- (13) 土田健次郎氏『朱熹の思想体系』第五章 第九節「知」と「行」（汲古書院、二〇一九）参照。
- (14) 『龍頭新增四書大全』学而「學而時習之」章の頭注に「四書存疑曰、學兼知行。……。」とある。なお、林希元『四書存疑』は、鶴飼石齋の訓点で『連理堂重訂四書存疑』として、承応三年（一六五四）に和刻

本が出ている。

- (15) 顔淵篇「以文會友、以友輔仁」章に対して、『論語鈔説』では、「上句属知、下句属行。文對而意相連。是就士君子為學、上論友道、當必如此。由講文以及輔仁亦為學之序也。……。」とする。これは「以文會友」を「知」、「以友輔仁」を「行」として解釈するものである。
- (16) 『孟子集注鈔説』告子下「學是知行。如堯舜精一、孔顏博約、皆法也」
- (17) 「楊齋先生行狀」に「先生為學也、以明倫推孝為修身之地頭、求仁修天職為立心之本領、涵養・致知・力行、為學之大要」とある。「涵養・致知・力行」の強調は、同じく立軒の手による楊齋の語録『仲子語録』の卷頭にも「先生謂謙曰、學者立心須高遠、而用功須從近切處。漸進去、存養・致知・力行三者、日用功夫之干要。而三者又以存養為本」とある。
- (18) 『語孟字義』卷之下、「學」第三条に「學問以道德為本、以見聞為用。孔子曰、有顔回者好學、不遷怒、不貳過。可見聖人以修道德為學問、而非若今人之以道德為道德、以學問為學問也。……可見以見聞為用、而非若今人之專以靠書冊講義理、為學問之類也。孟子所謂存養擴充之類、皆即是學。先儒云、學兼知行而言。得之矣」とある。なお、吉川幸次郎氏・清水茂氏校注『日本思想大系 33 伊藤仁齋・伊藤東涯』（岩波書店、一九七二）では、「先儒云」に頭注をつけ、「出所未詳」としている。
- (19) 土田健次郎氏「伊藤東涯の『論語古義』講義——古義学の基本的性格」(『新しい漢字漢文教育』七三、二〇二二)「五 引文献の拡大」には、『四書章句集註鈔説』が議論の対象となっていたことが示され、「東涯らは楊齋の『論語』解釈をかなり意識していた」との指摘がある。